

No.178

2016.  
3.15

# 岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名  
(岐阜県百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL 0575-28-3111

## 岐阜県博物館人“活躍”の時

岐阜県博物館協会 会長 若宮 多門



本年5月28日に岐阜県博物館協会の創立50周年記念の式典を計画しています。振り返るに、50年(半世紀)にも及ぶ歴史は真に感慨深いものです。

設立の頃の先輩方のご苦勞、全国的に広がる地域博物館建設の気運と加盟館の増加、2度の全国大会の開催、研修会や講演会を通じての会員の資質向上やネットワークの構築、そして県民へのアピールなどと、実に多くのことが思い出されます。

また先の40周年からは、これまでの事業の見直しや組織改革、新たに県内企業等からの資金援助を頂き活動する中、いよいよ50周年を迎える訳です。今日まで協会を支えてくださった会員の皆様、県をはじめとする関係各位、そして資金援助を頂いております田口福寿会様、大垣共立銀行様、十六銀行様、岐阜信用金庫様、東濃信用金庫様、高山信用金庫様に心よりお礼申し上げます。

しかし、当協会の根幹である各会員施設を取り巻く状況(全国的にも)は、

- ・市町村合併による施設の統廃合
- ・指定管理者制度や評価制度の導入
- ・研究者や職員の削減
- ・運営や資料購入の予算の削減
- ・各施設やその設備の老朽化
- ・各施設の資料収容能力の限界

など様々な課題が山積みです。博物館の本来の使命を思うに、誠に憂うべき現状がここ何年も続いています。

しかし、これからの課題に向自し、また新たな方向を目指し乗り越えて行かねばなりません。地域の博物館は、文化の保存・継承・発信の核でなければならないのです。

この岐阜県を見渡せば、世界基準と言える多くの文化が受け継がれ残されています。

昨年末、「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定されました。これは本県における「白川郷の合掌造り集落」、「本美濃紙」、「曾代用水」に続く“世界”を冠する遺産の4例目という快挙です。他にもユネスコ指定の「白山エコパーク」やユネスコ無形文化遺産への登録待ちをしている「高山・古川・大垣祭の屋台・山行事」及び将来登録が期待される「長滝の延年」、「真桑人形浄瑠璃」またユネスコ記憶遺産への推薦が決定した「杉原千畝の資料」と、岐阜県は世界基準の遺産の宝庫です。これらの遺産を一地方に留めることなく、広く全国へと発信しなければなりません。本年2月には県知事と世界遺産関係9市町村長による岐阜県「世界に誇る遺産」連合が設立され連携して内外へ情報発信などに取り組むこととされました。いよいよ岐阜県の博物館人の活躍の舞台が整ってきました。本県の博物館力を高めるチャンスなのです。

更なる朗報です。これも昨年6月3日フランス・パリで開催のICOM(国際博物館会議)において第25回世界博物館大会の開催地が日本の京都市に決定したことです。この世界大会には世界各国より約3000人の博物館専門家の参加が見込まれます。なおこの世界大会は3年に一度開催され、第25回大会は2019年です。これは翌年2020年の東京オリンピックに連動させる文化イベントとしても、その成果が期待されています。

岐阜県博物館協会では、5年ごとの周年事業を展開しています。オリンピックの翌年は55周年を迎えます。

「2021年」、果たして本県博物館を取り巻く状況は、いかがなんでしょうか? 岐阜県博物館協会会員の益々の研鑽を期待します。

# 岐阜県博物館協会創立50周年記念事業の概要

岐阜県博物館協会創立50周年事業企画委員会 委員長 可児光生（美濃加茂市民ミュージアム）

1966年（昭和41）6月に岐阜県博物館協会が設立されました。博物館やそれに携わる学芸員というものの存在が、社会でほとんど認知されていなかった時代、県内博物館に関わる人々たちが純粋な信念と情熱をもって立ち上げた組織です。その目的は「会員相互の連携提携のもとに施設活動の拡充発展をはかりもって、社会教育の健全育成に寄与すること」（1967年11月・第2回岐阜県博物館協会総会資料より）でした。

創立50年を迎え、岐阜県博物館協会としてはまず、その原点を振り返って協会の基盤を確認し、それを踏まえて、今の博物館がこれから果たしていくべき役割や存在意義を考えていくことが必要であると考えています。広く県民に対しては、博物館や協会のことをより関心をもってもらえるよう、そして地域にとって博物館が必要な場だと理解してもらえるよう、住民参加、地域性の視点も取り入れて様々な事業を展開し、博物館を中心とした地域文化の振興を図っていきたいと考えます。

また、これらの活動や事業を通して、協会の加盟館及び館職員に「覚醒」と「刺激」が起き、相互の交流と連携が深まって博物館協会全体の力が高まることをねらいとしています。

活動の指針として次の3点を定め、それに基づいて事業を進めていきます。

## ① 「のこす」

岐阜県博物館協会として、その基盤とアイデンティティを確立すること。

## ② 「ひろめる」

広く県民に対し、博物館を身近に感じてもらおうこと。

## ③ 「たかめる」

職員の資質の向上をはかるとともに、内外ネットワークを強化すること。

それぞれの部門において、協会加盟館及び個人会員の中から部会を組織しました。

2014年（平成26）10月以降、50周年事業企画委員会を3回開催、そして2015年度に入り、「のこす」「ひろめる」「たかめる」の個別部会と部会長副部会長会を合計20数回開催し、随時理事会に報告しつつ内容を検討してきました。創立50周年に向けての事業は次のとおりです。

## ① 「のこす」

### ◇創立50周年記念誌の発行

協会が歩んできた50年を振り返って現在の基盤を確認し、今後の指針を探ろうとするもの。これからの博物館協会と博物館が担うべき役割を考えるものとする。また、現状を把握するため、アンケートを実施（2015年度実施済み）し課題等を分析。A4判100ページ前後、印刷部数800部を予定。

### ◇デザイン戦略によるイメージアップ

創立50周年を機に、今後へのこす協会のロゴマークを新たに作成し、デザインによって新たなイメージを広く伝えるもの。開催事業の協会のタイトルや協会の封筒などにも使用していく。

## ② 「ひろめる」

### ◇県内博物館スタンプラリーの実施

博物館を訪れるきっかけづくりとして、受け入れ可能な加盟館をめぐってもらおうもの。参加者には各種の記念品を贈呈する。あわせて、協会加盟館の一覧とマップを作成する。

### ◇記念文化講演会の開催

多くの県民に興味を持ってもらえるテーマ、講師を選定して開催。博物館・美術館への関心を持ってもらうきっかけづくりとする。創立50周年記念式典と同日に開催。

### ◇加盟館情報の提供

記念式典開催にあわせ、県内博物館の活動を広く知ってもらうため、パネルなどで情報を提供するとともに、館が取り組んでいる普及プログラムを体験するワークショップを実施。

### ③ 「たかめる」

#### ◇連携企画事業の実施

協会で共通のテーマや課題を設定し、それに沿った展示や講座などの関連プログラムを加盟館それぞれが多角的、総合的に関わって実施するもの。2016年度テーマは「街道」。

#### ◇職員の資質向上と連携

職員研修の充実を図るとともに、テーマを設定して職員向けの研究集会などを開催し、スキルアップと意識向上をねらう。また近隣の関係機関や博物館関係学会との連携や情報共有などを図る。

#### ◇ミュージアムレスキュー体制の研究

災害時に備え協会加盟館でミュージアムレスキューネットワークを構築し、被災情報の収集、救済を円滑に進められるよう体制を整えるために調査研究を進める。

## 岐阜県博物館協会 創立50周年記念式典

### と き

平成28年 5月28日(土)  
10:30~15:00

### と ころ

みんなの森 んぎふメディアコスモス  
みんなのホール  
(岐阜市司町40番地5)

### 日 程

通常総会 10:30~11:30  
記念式典 13:00~13:30  
記念講演会 14:00~15:00  
演 題 「博物館は誰のもの？」  
講 師 山田五郎(編集者・評論家)  
1958年 東京都生まれ  
上智大学文学部在学中にオーストリア・ザルツブルク大学に1年間遊学し西洋美術史を学ぶ。卒業後、(株)講談社に入社『Hot-Dog PRESS』編集長、総合編集局担当部長等を経てフリーになる。現在は時計、西洋美術、街づくり、など幅広い分野で講演、執筆活動を行っている。

## 岐阜県博物館協会 創立50周年記念「ロゴマーク」



平成28年度の創立50周年にあわせ岐阜県博物館協会のイメージアップを図るために新たにロゴマークを作成することが今年度初めに決定されました。その後、記念事業企画委員会の「のこす」部会を中心に協会会長を含めて検討を進めこのたびにマークがこのように決まりました。今後より多くの方々には協会の活動に対して理解と親しみを持っていただけるように、協会の様々な事業の展開にあわせてこのマークを使用していく予定です。

デザインは、グラフィックデザイナー森美佳氏(zoomic)によるものです。

### ..... ロゴコンセプト .....

- G  
GIFUの「G」、土台、安定感、力強さ
- 全体のトーン  
楽しさ、若さ、親しみ感
- ポイント部分  
発想、ひらめき、発信、伝達、革新
- キーカラー  
岐阜の山、川のミックスブルー  
(特色：DIC-217)



## 第63回全国博物館大会に参加して

期日：平成27年11月18日(水)～20日(金)  
場所：広島県呉阪急ホテル・呉市海事歴史科学館

平成27年11月18日(水)、19日(木)及び20日(金)の3日間にわたり、広島県呉市において第63回全国博物館大会が開催され、約400名(岐阜県参加人数3名)が参加した。

本大会の開催地広島は、厳島神社(宮島)・原爆ドームの2つの世界文化遺産、多島美で風光明媚な瀬戸内海・美しい山容を有する地である。開会に当たり銭谷日本博物館協会会長よりご挨拶があり、その後文部科学省関係者、広島県知事代理、呉市長より祝辞を頂いた。



基調講演では、広島大学総合博物館館長 岡橋秀典氏から「地域に開かれた大学博物館をめざして—広島大学総合博物館の挑戦—」について講演を頂いた。捨てるものを生かす、チャンスを生かす、失敗は成功の基、小さく生んで大きく育てる、好きこそもの上手、初心忘れべからず等々ご苦労話を交えながら講演であった。



そして特別報告ではICOM日本委員会 青木委員長より「2019年ICOM京都大会の開催」についての特別報告があった。全国博物館フォーラムでは、半田専務理事司会の下、多様化する経営形態や博物館登録制度、危機管理、国際化など、日本の博物館が館種や設置者を超えて直面する中長期的な課題が討論された。発表者はMOA美術館 内田館長、西宮

市貝類館 山西顧問、東京国立博物館 栗原部長、文部科学省 谷合課長、文化庁 山下室長であった。最近の状況や課題を共有し、国の施策の紹介も行いつつ、フロアからの発言も求めながら、今後の取組についてが協議された。

夕方18:30からは情報交換会が行われ、地元の伝統郷土芸能の「音戸の舟唄」が披露された。



翌11月19日午前中は「未来を考える装置としての博物館」と題して呉市海事歴史科学館 戸高館長司会の下、シンポジウムが行われた。松山市坂の上の雲ミュージアム 松原館長、菟博物館 山本館長、広島県立大学 鈴木准教授らから学校教育や生涯学習、地域振興など、地域社会を取り巻く様々な問題と博物館の関係について、事例を交えながら発表があり「未来」を考える上で、博物館がどのような役割を果たすことができるのかという点について討論された。午後からは全国博物館フォーラム及びシンポジウムを受けて、①「博物館と教育」②「博物館と異業種連携」③「博物館と地域振興」のテーマのもと3分会に分かれ事例発表があった。

「博物館と教育」(分科会1)：広島平和記念資料館、府中市歴史資料館、呉市海事歴史科学館「博物館と異業種連携」(分科会2)：広島市子ども文化科学館、尾道学研究会、大和ミュージアム運営グループ「博物館と地域振興」(分科会3)：芸北民族芸能保存伝承館、周防大島文化交流センター、安芸高田市歴史民族博物館。

最後に全国大会決議が採択され大会は成功裏に終了した。尚、平成28年の第64回全国博物館大会は群馬県で開催される予定である。

(光ミュージアム 吉井隆雄)

## 第40回東海三県博物館協会研究交流会 地域資源を活用した博物館活動

期 日：平成27年10月10日（土）  
会 場：美濃和紙の里会館、和紙の里わくわくファーム交流館  
参加者：32名（岐阜県20名）

愛知・三重・岐阜の県博協会の交流を目的にした本事業。今年、和紙（本美濃紙）のユネスコ無形文化遺産登録で、昨年来、脚光を浴びる岐阜県美濃市にて、恒例の美濃和紙あかりアート展開催に合わせて実施されました。標記テーマで、三県3館より3本の事例報告、美濃和紙の里会館・船戸友数館長「美濃和紙を使った紙文化の発信とユネスコ無形文化遺産登録をめぐる」、愛知県陶磁美術館・大長智広学芸員「やきものの産地にある専門館としての37年」、輪中の郷・諸戸靖学芸員「地域の特性を生かした体験学習 輪中をテーマに郷土・文化・産業の情報発信」がありました。地域の特性を活かした体験プログラムや、地域資源を館事業にいかに取り上げるかについて先進的な取り組みが紹介され、触発されることが多かったです。とくに、岐阜・三重の2館の独自プログラムは、地域の文化資源を生かした本格的な内容で、まねのできない質の高さが印象的でした。



紙漉き実演の様子

以上のほか、当地ならではの紙漉き体験・実演などが盛り込まれた充実した研修でした。最後に、次回主催の三重県博協を代表して三重県総合博物館・布谷知夫館長から、交流研修の重要性に触れ、次回事業への参加が呼び掛けられました。参加者の発言にあったように、木曾三川・伊勢湾という水系に位置するひとつの文化圏にある館どうし一層の交流が図られればと思います。

（岐阜県博物館 南本有紀）

## 第143回公開講座 飛騨市美術教室

日 時：平成27年4月26日（日）～12月20日（日）  
（全13回）  
会 場：飛騨市美術館  
参加者：のべ274名

飛騨市美術館にて10月3日（土）から12月6日（日）まで開催した「上葛明広展」の関連イベントとして、上葛明広氏を講師に招き、ワークショップを開催した。

展覧会のメインでもある作品「焼岳」が山を題材としていることから、3つの山を描く内容とした。1つ目は世界の山「マッターホルン」、2つ目は日本の山「富士山」、3つ目はふるさと飛騨の山「穂高」とし、それぞれ山を想像しながら約2m四方の大きな段ボールに描いて制作した。

制作手順としては、まずは3つの山のグループに分かれ、見本の写真を見ながら山の稜線を描き、その線に沿って形を切り抜いていく。切り取った山には、配色や色彩をその山をイメージしながら塗る。また、切り取った部分は逆さにし、完成後の作品を立てたときに下に置き、立体感をつけた。

最初はどのように描いていいかわからず、躊躇していた参加者もみえたが、制作が進むにつれ、絵具を飛ばして描いてみたり、筆ではなく手や足を使って塗ってみたりと、体全体を使って制作していた。



制作の様子

顔にまで絵具をつけながら描いていた参加者からは、大きなものに大胆に描くということは、普段家や学校ではできないことで、とても充実した内容だったと感想をいただいた。

また上葛氏の提案により、1つの山を1作品作る予定であったが、マッターホルンは3作品、富士山は2作品、穂高は2作品、合計7作品もの山々を制作した。

ワークショップ終了後、完成した作品は「上葛明広展」終了まで、会場である飛騨市美術館研修室にて展示した。

（飛騨市美術館 小田桐瑛子）

## 第144回公開講座 連続講座

### 「Y夫人が愛した美の世界」

期 日：平成27年5月9日(土)～平成28年1月9日(土)  
会 場：中山道広重美術館  
参加者：のべ93名(全5回)

中山道広重美術館では、毎年1つのテーマを設け、「連続講座」(年5回程度)を開講しています。毎回異なる講師をお招きしており、今年度は「Y夫人が愛した美の世界」と題し、「吉村コレクション」(恵那市出身の故・吉村トシ子氏からご寄贈いただいた日本画・洋画・ガラス工芸品等)をメインテーマとして、ご講演いただきました。

マリー・ローランサンやルオー、ガレ、ドーム兄弟、そして荒川豊蔵まで。吉村コレクションを形成する作家にスポットを当て、彼らが何を考え、どういった作品を作ったのか、各方面のご専門の先生方に大変興味深いお話をうかがうことができました。

受講生からは「幅広い分野のお話を聞くことができてよかった」「作品にのみ目が行きがちだが、作家への理解を深めることができた」などといったご意見・ご感想をいただきました。

当館は平成28年、開館15周年という節目の年を迎えます。来年度は当館の原点である浮世絵に焦点を当て、草創期からその衰退までを概観します。著名な浮世絵研究者の先生方を講師陣にお迎えし、初心者から愛好家、研究者を目指す学生の方まで幅広くお楽しみいただける内容となっています。利用者の皆さまのニーズや期待に応えながら、これからも実りある講座を実施していきます。



(中山道広重美術館 中村香織)

## 第145回公開講座 森と日本人

期 日：平成27年8月23日(日)  
会 場：NPO瑞浪芸術館  
講 師：C.W.ニコル氏(環境保護活動家)  
参加者：100名

平成27年8月に瑞浪市のNPO瑞浪芸術館で開催された展覧会「森と日本人-佐渡の原生林 写真展-」に伴い、C.W.ニコル氏による基調講演が行われました。

講演に先立ち、オープニングコンサートとして丸山晶子氏によるピアノ演奏が行われ、来場者の方を楽しませていました。

ニコル氏は、北極での生物調査の経験や柔道をきっかけとして来日されたことなどを、ユーモアを交じえて説明しました。そして、来日して始めて見た日本の森や山の動植物が、欧米に比べて非常に多様性に富んでいることに驚き、感動したそうです。

その後、1986年に長野県信濃町の里山を購入し、その里山を「アフアの森」と名づけて森の再生活動を始めました。そして森が多様性を取り戻していく様子や森の現状などを、映像を交えて解説しました。

「森はただ保護するだけではなく、そこから恵みをもたらす昔の里山のようなやり方を続けている。里山は資源獲得だけではなく教育の場にもなる。そして近年注目しているのは森が持つ癒しの力だ。」と述べました。

特に近年、心に傷を負った子供たちや東日本大震災の被災者をアフアの森に招いた経験から、この癒しの力を確信し、これからはもっと自然に触れ合うような教育が重要であり、子ども達のためにも森を残さなくてはならないと説きました。

講演終了後には、来場者から「今では人の表情も数値化できるので、森に来られた方たちの表情の変化を計測してみてもは？」など活発な発言と質問がありました。

(瑞浪市陶磁資料館 砂田晋司)

## 第146回公開講座 まゆの家まつり

期 日：平成27年10月17日（土）  
会 場：美濃加茂市民ミュージアム  
参加者：300名

「まゆの家まつり」は、みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアムの開館当初から続く催しもので、養蚕民家を復元した建物（まゆの家）を会場に、昔の暮らしや伝承遊びを紹介する催しものです。今年のまゆの家まつりでは、真綿づくりやはたおりの体験、紙ずもうやケンケンパといった遊び、また里芋を使った芋もちなどのふるまいがありました。

中でも真綿づくりは、近隣の博物館でもなかなか体験できない内容です。前日に煮ておいた繭をぬるま湯の中に入れてほぐしていくと、ふわふわと広がります。サナギを出して、木枠にかけると真綿ができあがります。



ほかの出し物がにぎわう中、真綿づくりは、少し地味な出し物でした。そんな中、お婆さんと一緒に来たお孫さんが挑戦しました。お孫さんは、サナギが出てきた時「このサナギはどうするの？」と聞きます。そこでボランティアが、「コイのえさになるよ。」と教えました。つぎに真綿ができると今度は「できた真綿はどうするの？」と聞いてきます。そこで「真綿はねこ（袖のない綿入りの冬着）の中の綿を包むために使うんだよ。」と教えました。

このボランティアはあとで、「体験することで疑問が広がり、その子の中で次々につながって知ることができてよかった。これがこのまつりの本来の目的だね。」と話してくれました。今後も続くことを望んでいます。

（美濃加茂市民ミュージアム 渡辺祐子）

## 第88回会員研修会 文化財／ミュージアム・レスキューを考える

期 日：平成27年9月24日（木）  
会 場：岐阜県美術館  
参加者：37名  
講 師：浜田 拓志（和歌山県立近代美術館副館長／  
和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議事務局）

本誌3ページでご紹介しているように岐阜県博物館協会では創立50周年記念事業のひとつとして「たかめる」部会で協会機能の強化と会員の資質向上を目指した事業を計画し、現在、共通テーマによる企画展示と文化財／ミュージアム・レスキューのためのネットワーク構築の2本の事業を検討中です。今回の研修会は、後者の情報収集と会員館の機運盛り上げを意図して企画され、会員のほか県教育委員会社会教育文化課からも2名に参加いただきました。

県内博物館のネットワーク組織がなかった和歌山県で文化財レスキューを根幹にした組織づくりを中心になって行った講師から、連絡会議の組織づくりの実務と運営について概説していただきました。



勉強会の様子

講演会の後、「たかめる」部会を中心に有志による講師を囲む勉強会も実施され、実務的・具体的なノウハウについて直接質問できる有意義な集まりとなりました。とはいえ、実際のネットワーク作りは会員をはじめとする各方面の理解と熱意が必須です。今後、ブロック毎の連絡会議等を重ね、気運の醸成に努めていきますので、会員の皆様のご協力・ご鞭撻をよろしく願います。

（岐阜県博物館 南本有紀）

## 第89回会員研修会 博物館のゆくえ

—2019年ICOM日本大会を見据えて—

期 日：平成27年10月24日(土)  
会 場：美濃加茂市民ミュージアム  
講 師：半田 昌之 氏 (公益財団法人日本博物館協会  
専務理事、ICOM日本委員会副会長)  
参加者：21名

美濃加茂市民ミュージアムで開催された、ミュージアムフォーラム「地域博物館がこれからめざすところ」と併せて行われ、半田昌之氏が講演しました。

半田氏からはまず、日本の博物館を取り巻く状況が示されました。全体的には、施設や設備の老朽化、収蔵庫の資料収容能力が限界を超えている館の増加、博物館活動の力点が「収集保存」から「教育普及」に移ってきているようです。そこでは博物館の「本来的な博物館力」が低下しており、例えば資料受入の停滞は、流出する文化遺産の受皿としての機能が担えていないこと等に直面しているとの指摘がありました。

今後、地域の博物館は、社会教育機関としての位置づけと機能確保を前提としながら、「文化の保存・継承・発信の核」となっていくことが求められています。歴史や文化を介した人々のコミュニケーションの「架け橋」、人が集う「フォーラム」の場、地域文化の発信拠点等として、地域に果たせる役割が挙げられました。

2019年ICOM京都大会では、世界の博物館が直面している、地域や社会の課題が国際的に議論されることにもなるようです。博物館は、それらとどのように向き合い、その解決のための役割を果たすことができるのか、考えを深める機会となるのでしょうか。そのことは、私たちにとっても、大切な視点であると考えられます。

会場の参加者からは、館の現状、今後の在り方に対する意見やコメントも出されました。



(美濃加茂市民ミュージアム 藤村 俊)

## 館・園紹介 No.158

### 美濃和紙の里会館

〒501-3788 岐阜県美濃市藤生1851番地3  
電話/0575-34-8111 FAX/0575-34-8280  
URL/http://www.city.mino.gifu.jp/minogami/

### ユネスコ「世界無形文化遺産」 登録より1年を迎えて

平成26年11月27日(日本時間)、日本が提案した「和紙：日本の手漉和紙技術」がユネスコ無形文化遺産に登録されることとなり、当市の「美濃和紙」の中でも特に最高級の障子紙として広く知られている「本美濃紙」を含む「石州半紙(島根県)」「細川紙(埼玉県)」の3つの手漉き和紙の製作技術が世界に認められたということです。

美濃和紙の里会館は、美濃市制40周年事業の一つとして、また1,300年の伝統を受け継ぐ美濃和紙の継承と後継者育成および情報発信の拠点として、平成6年10月にオープンしました。

当館は、美濃和紙を広く紹介する展示を中心とする博物館機能と、新商品開発や新たな販路拡大を図る産業・観光機能を併せ持つ、参加体験型の“紙のテーマパーク”です。

館内では和紙の歴史や製造工程、全国の和紙や和紙の使われ方などを紹介した常設展示室と、「紙」をテーマにした企画を年間6回程開催する企画展示室があります。

また、職人と同じ道具と楮100%の原料を使ってやる「紙すき体験」は大人気です。縦横交互に数回揺する伝統技法「流しすき」で障子紙ほどの厚さの和紙を作ることができます。作った和紙は専用のキットで照明スタンドやミニ衝立にもでき、自分だけのオリジナル和紙が作れます。ユネスコ登録から来館者が一層増したことにより、体験用の国産原料が不足してしまい、現在はバラグアイ産楮を混ぜて使っています。

また、手漉き和紙職人を志す方たちのために、紙すきの基礎が学べる研修など後継者育成事業にも力を入れています。



(美濃和紙の里会館 船戸友数)